

## 50 周年特別寄稿 松本市に県立自然誌博物館建設を

近田 文弘\*

静岡市在住であった杉本順一先生は、かつて「静岡県は植物の種類が多いが、個体数は長野県と比べてずっと少ない」と書かれました『静岡県植物誌』(1984)。これは名言と感心していますが、私自身はそれを実感するように長野県の植物に親しんだ経験がありません。一方、私は長野県の植物を研究された清水建美先生に公私共に大変お世話になり、また小泉秀雄先生の膨大な標本の整理をさせて頂いたことがありました。そのことを振り返りながら、長野県植物研究会の皆様のこれからの活動への期待を述べたいと思います。

清水先生に初めて海外調査にご一緒させて頂いたのは 1985 年のマレーシアとタイのハウセンカ属調査でした、続いて中国の天山の高山と砂漠の植物調査がありました。その頃から清水先生は国立科学博物館の金井弘夫先生とコンピュータによる標本情報の利用を始められておられました。この成果が植物の地理的分布に加え高度別分布の情報として『長野県植物誌』に生かされています。

小泉先生は大正 9 年から 13 年間松本女子師範学校で教鞭をとられ、南北両アルプスや木曽谷の植物を調査されました。そして小泉先生が採集された 16 万点のおし葉標本が昭和 28 年に国立科学博物館に寄贈されました。その一部は整理を待つように残されていました。私は同館の標本を整理する立場にありましたので、ボランティアの協力を得て整理することができました。

平成 9 年に『長野県植物誌』が出版されました。ご承知のように、この植物誌が非常に高度な内容で、現在の長野県のフロラを正確に把握し、自然環境の基礎資料の基礎となるものでした。清水先生のご苦労は、出版前には側で拝見していても心配なほどでした。

自然環境の保全を含めた長野県の未来には以下の三つの行政の取り組みが必要となるでしょう。そして、その火付け役を担う存在として「長野県植物研究会」に期待したいのです。

その第一は、新しい時代に対応した自然環境保全

策の展開です。時間の推移と共に、植物相や動物相、植生が変化し、社会的環境も変化します、それに対応する視点で新たな植物相や動物相、植生などの情報が求められます。植物相の新しい情報は現在の『長野県植物誌』との比較による自然環境のモニタリングの役目を担うでしょう。その情報源である『新・長野県植物誌』は一気にできるものではありません。地味な研究の積み重ねがそれに繋がるのです。今回の 50 周年記念はその出発点になるのです。

その第二は、未来の科学者や文化人を輩出する県民の眠れる能力の発現に寄与することです。細胞の中で不要物を壊す仕組みを発見して、作年ノーベル賞を受けられた大隈良典博士は、昆虫少年で、蝶の観察に熱中し、何だろう、何故だろう、という自然に対する興味が、やがて研究の源となったと述懐されています。また、2001 年に化学反応に関する研究で受賞された野依良治博士は神戸近くの野山を駆け回って自然に親しんだ少年で、その経験から自然を観察する理科や科学を学ぶことの大切を述べられ、さらに受賞のインタビューで「文化を尊ぶ文明」を作るべきであると話されました。2015 年にアフリカの寄生虫病の特効薬を、日本の植物の葉のカビから作られた大村智博士は少年時代から科学に興味を持つ人材を育てる意味を語られました。日本人のノーベル受賞者は 25 名に達し、世界有数の数です。最近のノーベル受賞者の幾人かの科学者は、子供時代の自然観察教育や科学教育の大切さを指摘されています。長野県は、教育県として知られています。また、素晴らしい自然に恵まれています。科学教育の一層の充実を図る良い条件が揃っているのです。推進する核が必要です。

その第三は、自然環境の保全と観光資源の保全及び開発に寄与することです。

ひと昔前まで、観光開発は経済的利益追求のみで、自然を破壊するものとして指弾されました。しかし時代は変わりつつあります。海外からの観光客は、日本の自然とそれに寄り添って生きる日本人の生活に魅了されて急増しています。この傾向はオリンピックを契機に益々強くなるでしょう。日本の自然とは、日本の自然環境が育んできた特有の自然で、

\* 国立科学博物館名誉研究員

〒110-8718 東京都台東区上野公園 7-20

それは国際的に重要視される生物の多様性保全の理念から支えられるものでもあります。日本はまさに、生物多様性のレッド・スポットなのです。本州の中央に位置し、日本アルプスの核心を擁す長野県の自然と風土は、国際的に質の高い観光地としてその保全即ち、自然保護が観光開発の要でもあるのです。清水先生が指導された白山の高山植物園は、そのような視点を持ったものと思います。

以上の三点に対応する行政組織として長野県自然誌博物館を設立する必要があります。その内容は、自然環境保全部門、科学教育部門、観光施策部門として三部門の総合的施策を推進する全国に例のない組織となるべきです。この博物館は、信州大学教養部におられた清水建美先生を中心とする長野県植物研究会の活動拠点であり、上高地を始め山岳景勝地の中心がある松本市に設置されるべきであると思料します。

自然環境保全部門の施策は現在、長野県環境保全研究所が担っていますが、長野県の自然環境の十分な知見に立脚しているとは考えられません。最も重要な植物の押しは標本が15万点所蔵されていますが、その多くは東日本（恐らく秋田県産）の採集品ということです。本当の長野県産の標本は信州大学にあります。その中には長野県植物研究会の会員による採集標本も多数あると思われます。これらの標本が、同研究所の標本室に所蔵されていないのは不可解です。同研究所設立の頃には長野県植物研究会の会員による『長野県植物誌』の調査が進行していたと思われますが、研究会と同研究所の間で協力試合う話し合いはなかったのでしょうか。また、標本と同様に貴重な分類学研究に欠かせない専門書、論文の別刷りなど多くの文献と書類が、清水建美先生の遺品として信州大学にあります。同研究所は、公害防止など県民の実生活と関係する行政を扱っていて、自然物である植物や動物、植生、地質などに関する研究部門が中心ではありません。

（コメント1：この部分についてはこの10年間で大きく変わり、上記研究所の標本は18-20万点、全国・長野県からの資料も多く、ボランティア活動も継続されています。信州大学の植物標本・文献資料は「信州大学自然科学館：2012～」に25-30・10万点ありますが、まだ標本作成・配架が課題であり、ボランティア組織充実が必要・・・）

科学教育部門の活動が上記の研究所でも行われて

いますが、他府県の県立レベルの自然誌博物館の活動に比べておざなりともいえるべき貧弱さです。また、小学生から成人まで県民が広く学ぶに足る充実した図書館や、解放された集会所を利用したサークル活動なども低調と思われます。要は、上記のノーベル賞受賞者の方々が述懐されたような自然への理解と感性を持つ人材を如何にして育てるかを研究し、実施する組織を作ることで、その任に現在の上記研究所では対応できないということです。それは、上記研究所は自然誌博物館が持つべき基本的な機能を組織の中心として備えていないからです。さらに言えば、長野県は自然環境が他に類の無いほど豊かなのに、自然誌博物館を持たない後進県のままであるという理不尽にあります。

（コメント2：この分野もここ10年で大きく変わり、同研究所では出前講座・大学との連携など行われており、「信州大学自然環境診断マイスター養成：2007～2016」においても長野県環境保全研究所からの人材派遣・特別講義・実験などを担当された・・・）

観光施策部門は、上記の二部門を合わせ持つ全く新時代の組織です。それを一口で言えば、“おもてなし”の観光の推進です。信州の自然が如何に美しく貴重なものであるか、信州人が、如何に自然の素晴らしさを感じ、感動して日々を過ごしているかを、“おもてなし”することです。

当面すべき「長野県植物研究会」の活動は、“松本市に県立自然誌博物館を建設する運動を起こすこと”です。

- 1) まず、今回の50周年を機会に会員で県立自然誌博物館について白紙でディスカッションすること。
- 2) 県立自然誌博物館の推進が大方の意見であったら、信州大学のおし葉標本と文献・図書などを新設の県立自然誌博物館に移管することの可否について検討すること。
- 3) 既存の県立自然誌博物館の内容について資料を収集し、見学すること。
- 4) 『新長野県植物誌』の編纂への準備を開始すること。現在の『長野県植物誌』を基礎に今後一定の期間（5～10年）で社会の動向を考えて自然環境モニタリングの観点から何ができるかを検討する。
- 5) おし葉標本の新しい蓄積の場所の確保を考え

る。現在はチャック付きのポリエチレン袋があり、パラジクロールなどの防虫・殺虫剤が市販されているので、おし葉標本を標本カバーごとチャック付きのポリエチレン袋に入れ更に衣装ケースなどに入れて保管が可能になった。しかしその保管場所が問題。

- 6) 一年後くらいに準備の状況を見て、県庁の自然保護課、環境保全研究所、観光課などの担当者；県議会議員の誰か；マスコミ関係者と面談して県立自然誌博物館を作る意義について意見を聞く（賛成意見でなくとも良い）。

- 7) 検討した内容を整理して「長野県自然誌博物館建設に関する意見書」にまとめ、県知事と県議会議長に提出すること。

（コメント3：国立科学博物館の植物資料部門で活躍された近田先生に、長野県に自然誌博物館をめざすための檄文（激励）を頂いた、深く感謝する次第である。近田先生は100年前の寒地植物の父・小泉秀雄先生および50年前の植物研究会の父・清水建美先生を深く理解されている方である・・・ミニコメント1～3：佐藤利幸 文責）